

## 【研究ノート】

大学生の英語科指導における内発的動機付けおよび社会への関心を高め、地域との連携を強める試み：

松本子ども留学の中学生との中大連携を通じた内発動機付けと学習支援、および地域連携

花崎一夫<sup>1)</sup>、花崎美紀<sup>2)</sup>、植木 宏<sup>3)</sup>、藤澤 翔<sup>4)</sup>

### 【要旨】

信大文学部英語学研究室では、以前から行っていた高大連携、保大連携に加えて、2015年から小大連携および中大連携の枠組みの中で英語活動を実施し、学生の内発的動機を高めてきた。まつもと子ども留学は、2011年3月の東日本大震災の後、東日本大震災の被災地に住む小学校3年生～中学校3年生の子どもを対象に、NPO「まつもと子ども留学基金」が運営母体となり、「被災地の子どもたちが安心して生活し、遊び、勉強する場所づくりを目指して、信州松本の地で立ち上げられた」留学プロジェクトである。現在、合計8人の小中学生が親元から離れて生活している。当該プロジェクトは、資金の問題、そして、人的な問題を抱え、特に学習支援の人員を必要としていた。一方、信州大学文学部英語学研究室では、英語科指導法において、将来、教員を目指す学生の内発的動機付けを高め、社会に目を向けるきっかけづくりを急務としていた。そこで2015年より、英語を中心とする学習支援によって、このプロジェクトと連携することを目指し、生徒と学生の交流を進めてきたわけであるが、本稿は、その連携活動の主旨と活動の報告を行うものである。

キーワード 中大連携、地域連携、NPO 法人まつもと子ども留学、内発的動機づけ、ICTを活用した英語教育

## 1. はじめに

地域連携は、昨今、大学をはじめとするすべての学校に求められている大きな課題である。例えば、大学においては、教育・研究が大学の果たすべき重要な役割とされてきたが、現在では、大学の果たすべき使命の3本柱に、地域連携が加わっている。（「信州大学地域戦略センター主旨」参照）信州大学文学部では、さまざまな活動を通して、高大連携および保大連携を進めてきたが、2015年度

からその地域連携を、小大連携および中大連携に拡大した<sup>5)</sup>。本稿は、その中の中大連携の概要および活動について報告するものである。

## 2. NPO法人まつもと子ども留学

### 2.1. まつもと子ども留学の概要

著者の一人、植木が理事長を務める「まつもと子ども留学」は、2011年3月の東日本大震災のあと、東日本大震災の被災地に住む小学校3年生～中学校3年生の子どもを対象

に、「NPO法人まつもと子ども留学基金」が運営母体となり、「被災地の子どもたちが安心して生活し、遊び、勉強する場所づくりを目指して、信州松本の地で立ち上げられた」留学プロジェクトである。大震災から数年の歳月が経過した今も、「不透明な状況の中で、育ち盛り子どもたちにとって制約の多い暮らしが続いていることが危惧される」ため、「自然の恵み豊かな長野県松本市の北部四賀地区に寮を設けて生活し、地元の学校に通学する」プログラムである。寮にはスタッフが常駐し、子どもの身の回りの世話をし、また、保護者の方は勿論、地域の人たちとの関わりを大切にし、地域と一緒に子どもたちを育てていくことを大きな目的としているプロジェクトである。（「まつもと子ども留学ホームページ」より）

当プロジェクトは、松本市と市民団体が協力して、原発事故の被災地に暮らす子どもたちを長期的に寮に受入れる全国初のプロジェクト【松本モデル】として、2014年4月に8人の女子（中2が4名、中1が3名、小6が1名）の入寮でスタートし、その後、家庭等の都合により、2名が地元福島に転校し、現在、寮には6名が生活している。2015年には、この「松本モデル」の発展型のプロジェクトも始まっている。現在、当初からある寮だけではなく（女子寮なので）、松本市内の一般家庭に、福島県から2人の男子（中1）がホームステイして、2015年4月より松本市内の中学校へ通学している。さらに、過疎化対策の一環として松本市の乗鞍高原にて「のりくら未来創り協議会」の方々が2名のホームステイ留学生の受入れを募集中である。というのは、次節以降詳しく見るが、本プロジェクトは、善意の募金および、助成金で運営しているので、【松本モデル】には財政問題という課題がある。これに代わって、より

低コストで実現可能、各地で応用可能なモデルとして、【ホームステイ型留学】に注目し始めたということである。つまり、「行政」と「市民団体」と「市民」と「地域」とが連携して運営する”松本モデルの発展型”として【ホームステイ型留学】の新たな試みへと発展していつている。つまり、2011年の東日本大震災の際に起こった福島第一原発事故によってまかれた（と思われる）放射能による健康被害を避け、少しでも安心、安全な場所で子どもたちの生活を支えるプロジェクトを松本市と共に受入れ先を四賀地区に作ったプログラム、それが「まつもと子ども留学」の概略と言えよう。

## 2.2. まつもと子ども留学が抱える課題

当プロジェクトが抱える問題は次の2点にまとめられるであろう。

### （1） 松本子ども留学が抱える問題

- A. 財政問題
- B. スタッフ問題

まず、財政問題についてであるが、上述の通り、募金と助成金で運営している状況であるので、定期的な寄付の仕組みである「マンスリー基金」、クレジットカード決済、銀行からの「自動引き落としサービスシステム」、携帯からワンコインから始められる「かざして募金」などの制度を確立させたが、やはり、慢性的に不足している状況であると言える。

そして、スタッフの問題としては、寮での世話だけでなく、様々な仕事、例えば、広報の人員、助成金申請作業の人員、そして、子供の勉強サポートやイベントサポートをしてくれる人員が不足している。

### 3. 英語科指導法における、大学が抱える課題

信州大学人文学部英語学研究室では、将来教職に就くことを夢見ている学生を指導しているが、その際に抱えている課題がある。別稿（花崎&中村（in press））にも述べた通り、平成27年12月、中央教育審議会総会において、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学びあい、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて（答申）」がまとめられた。「近年の教員の大量退職、大量採用の影響」をうけ、「教員一人ひとりのスキルアップを図り、活躍できるような環境整備を図ることが重要」であり、そのために必要な「教員の養成・採用・研修の一体的改革」を推し進めることが目標で書かれた本答申は、これからの制度設計・施策を考える元となることは確実である。（「答申（案）要約」より）

その答申の中には、教員が学び続ける制度や、採用制度などの変革についての答申が書かれている一方で、教員養成を行う大学学部への要望も記載されている。その要望の中には、教職科目と教科科目の統合など、制度改革として取り組まなくてはならないものもある一方で、現行カリキュラムのなかで積極的に取り組むことができる要望もある。具体的には、以下が挙げられる。

(1) 「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（答申）」から見る、学部における教員養成改革の具体案

- ・ 1、2、3 年次における学校インターンシップなどを通して、教職志望の学生が、自らの教員適性を早い時点から見極めることのできる仕組

みづくり

- ・ ICT教育の充実
- ・ 英語教育の充実
- ・ 小学校における外国語の指導法

以上の課題は、大きく次の2つにまとめることができるであろう。

(2) 大学が抱える英語科指導法の課題

- C：教員志望の学生の能力を高める方策（教員適性を自ら見極めることができるようなきっかけづくり、英語能力を上げる方策）
- D：教科指導法の内容を変える方策（ICT教育の充実、小学校英語の指導法）

さらにそれに加えるに、最近の学生はおとなしい、殻に閉じこもっていると言われて久しい。我々の個人的な感覚から言っても、自分の生きている世界のことにしか目を向けない学生が多いように思える。そういった学生が外の社会に目を向けさせるきっかけづくりが必要であると常々感じているところである。特に、教職志望の学生には、いろいろな生徒と向き合う必要があるので、社会のいろいろな現実を知る必要がある。よって、(2) のCに一つ加えて、以下が課題と感じているところである。

(3) 大学が抱える英語科指導法の課題

- C'：教員志望の学生の能力を高める方策（教員適性を自ら見極めることができるようなきっかけづくり、英語能力を上げる方策、社会の現実にも目を向ける方策）
- D：教科指導法の内容を変える方策（ICT教育の充実、小学校英語の

指導法)

#### 4. 本中大連携のきっかけ

花崎らは、まつもと子ども留学に対して、当該NPOが発足したころより関心を寄せ、報道・記事を気にし、多くではないが協力をしてきていた。しかし、それを大学の活動として、ましてや、授業と関連付けて行うことにはためらいを感じていた。まつもと子ども留学は、大なり小なり政治的な信念をともなう活動であり、国立大学法人において、政治的な活動は禁じられているからである。(地方公務員法第三条、国家公務員法第一〇二条等 参照)

そんな折、経済学部のア藤絵美子特任准教授(ア藤准教授はご家族が、当該NPOの幹事をなさっておられる)より上述の学習支援が大学生にできないかというご相談を受け、ア藤准教授の後押しもあり、(3)の課題を克服することができる連携として発展できると判断し、植木と花崎の間で協議を重ね、2014年度より本連携プロジェクトを開始し、2015年度からは、学習支援を、信州大学人文学部における「英語学基幹演習Ⅲ」という授業の一環として開始した。(なお、予算に関しては、人文学部長特別裁量経費が配分されている)

#### 5. 実際の活動の報告

学習支援を目標に、実際の活動は、大きく分けて次の4点にまとめられる。すなわち、

##### (4) 本連携の実際の活動

- 1) 勉強指導
- 2) 進路相談
- 3) 人生相談
- 4) リクリエーション

1) は当初から本連携がもくろんでいた、「まつもと子ども留学」が抱える課題Aを克服し、大学の英語科指導法が抱える課題Cを克服する、学習支援による、将来教職を目指す学生の内発的動機を高める方策である。同時に、家族から離れている生徒にとっては、年も近いお兄さんお姉さんに相談したいこともあり、2) 3) が行われている。これは、大学生にとっては、社会を知り、中学生の生の悩みを聞くことにより、将来教職に就く際の参考にすることができる内容であると思われる。そして、4) として、中学生と大学生の交流が図られている。

以下、具体的に、4つの活動について概観する。

##### 5.1. 勉強指導

本プロジェクトでは英語を中心に、しかし5教科すべてを1年生から3年生の中学生の子どもたちに教えている。そして子どもたちの弱点とする教科と大学生の得意とする教科を照らし合わせて指導している。そこで行っている具体的なこととして、苦手教科克服、定期テスト対策・テスト直し、受験対策を行っている。

まず苦手教科克服においては、大学生がプリントや問題集を用意したり、子供たちが持っているテキストや問題集を利用してわからない点を教え、弱点を克服している。また宿題の指導も行い、勉強の習慣づけをしている。例えば、英語なら教科書と問題集でわからない単語や文法(関係代名詞の使い方など)を、表を書いたりして教えていく。そこで気を付けていることは、生徒の表情を見ることである。表情を見れば理解しているか、していないか一目瞭然であるので、わからないまま放置するということはない。またリスニング対策でYouTubeやネットを利用



した勉強法を提示し、時間の余裕があるときに行わせている。

2つ目の定期テスト対策・テスト直しでは、1、2年生はテスト範囲を中心、苦手な教科を指導する。3年生は総合テストであるため、1～3年生の既習事項でわからないところを中心に指導する。テスト前の活動は、まず演習を行い、解けない箇所を補強してテストに臨ませる。そして、返却されたテストで間違ったところを詳しく解説し、解き直しを行なわせる。そこで気を付けていることは、点数にだけ注目せず、たとえ90点台でも、間違ったところは解説と解き直しを行い、わからないままにしないことである。

最後の受験対策は主に3年生に対し、普段の勉強法を見直し、効率のいい勉強法を教え、受験のための時間の使い方をスケジュールしている。また、宿題を出し、苦手科目を得意にかえ、また得意教科が得点源になるべく、さらなるレベルアップをするため、ICTを活用し、勉強を教えている。また英検や数検の対策も同時に行い、その相乗効果で英語や数学の力を伸ばしていくことを心がけている。

以上が本プロジェクトでの勉強指導として行っていることである。これらの勉強指導において共通して気をつけていることは、子どもたちにわかりやすく丁寧に勉強を教え、勉強が楽しいと思ってもらうことである。そして、試行錯誤していく中で、自分たちの今後の勉強や研究における内発的動機にもなるという相乗効果が得られるという意味で、有意義な活動となっている。

## 5.2. 進路相談

進路相談は主に3年生に対して行い、志望校のレベルにどう対応していくか、今後の進む道はどうしたらいいかななどを指導してい

る。

志望校のレベルに対してどう対応するかについては、普段のテストの総合点から合格可能範囲にどう持っていくかの指導を行っている。例えば志望校の合格可能範囲が平均点+20で、現状の自身の点数が平均点以下なら普段の勉強法を見直し、さらにそれぞれの教科で正解しやすい問題は必ず正解し、たとえ難問は解けなくても、まずは、確実に正解できるところがより確実になるまでは手をつけないようにするといったことを指導していく。また、志望校がどのようなところか事前に調べ、おおよその概要を話したりする。そこで心がけていることは、ダメかもしれないと思わず、戦略を一緒に考えてできることからはじめ、チャレンジ精神を涵養することである。

将来の夢に関しては、ゆっくり自分を見つめてもらい、今何をすべきか考えて、そしてこれからどうしていくかを考えることで、結論を子どもたちから見つけさせていく。

ここでの進路相談は、様々な受験を体験した大学生の生の声を話すことで、子どもたちの知らないことを教え、体験談から何らかの鍵をつかんでほしいと思っている。大学生も、自らの体験を振り返ることで、自分がしてきた体験を見つめなおし、今後の就職活動に生かしていけるはずである。

## 5.3. 人生相談（恋愛）

勉強を教えている間、もしくはリラックスタイムでの会話の中で、悩み事（進路相談は含まず）や思春期における恋愛の話も多く相談をうけている。

将来に関しての悩みでは、高校での生活、大人になったときの仕事が主にあげられる。高校での生活では、授業に関することが主で、中学との勉強の違いは何があるか、宿題

はどのくらい出るかなどが多い。ここで気を付けていることは、あまり不安にさせないことである。勉強してほしいがあまり、話を大きくしてしまうと、受験勉強にすら手がつかない恐れがあるからだ。ここでは高校生活で勉強がしっかりできるように助言するにとどめ、現状の勉強をおろそかにさせないようにしている。

次に恋愛の話では失恋の話がある。ここは人との付き合い方にもつながり、誰かに好意を抱いて思いを告げることへの大切さや失敗から学べることはたくさんあるなど、あまり深く悩ませないように配慮した助言をしている。かなりセンシティブな話題でもあるので、自身の体験談を話して、こんなこともあるのかと自分だけが悩まないようにさせている。そうすることで、その悩みでずっと抱えさせず、自分が今やるべきことに気づかせている。ここで気を付けるべきことは、「そんなことで悩むより勉強しろ」といった話題転換をしないことである。もっともらしいと思われがちだが、子どもたちはまだ思春期で人生経験も豊富ではない。だからこそ、その場に出てくる悩みに真摯に向き合い成長させるべきであると考えからである。

以上のことが、子どもたちから出てくる人生相談に関することである。主に高校での生活や恋愛だったが、どちらも大人になってから新しい環境や対人関係における出来事とつながってくる。相談をうけている大学生にとっても自身の経験をふり返る機会となったり、話をきくことにより、間接的経験値をふやすことにつながっている。将来、教職をめざす学生にとっては、さまざまな生徒・児童の考えていることを知り、自身が教べんをとる際に参考にできることが多いように思われる。

## 5.4. リクリエーション

親元を離れ、寮生活を過ごしている児童にとっては、なかなか外出する機会はない。そこで、大学生とのリクリエーションも実施している。例えば、2014年度には、タコスパーティーと称して、寮生に大学に来てもらい、一緒にタコスを作って楽しんだ。

2015年度には、バーベキューパーティーやクリスマスパーティーを開催した。現在、バスを利用した遠出も計画中である。

このような活動を通して、留学プログラムの子どもたちにとっては憩いの時間に、大学生にとっては社会勉強になることを願っている。

## 6. 結語

本留学プログラムは、2011年に起きた東日本大震災にて起こった福島第一原発事故により、大地そして人々に降り注いだ放射能による健康被害を避け、少しでも安心、安全な場所で子どもたちの生活を支えるプロジェクトを松本市と共に受入れ先を四賀地区に作ったものである。現在、男子2名（島立にてホームステイ）、女子6名（四賀の寮）の計8人の子供たちが親元を離れて共同生活をしているわけであるが、毎日様子を見ている植木が見る限り、当初は元気がなかった子どもたちも、たくさんの方々の愛情やご支援のもと、すっかり体調もよくなり、元気に毎日を過ごしている。

特に、NPOからの印象としては、昨年より信州大学の学生たちが寮にきて行っている“学習支援”が、より子どもたちの励みになっていうようである。一人では解けない問題も、年の近い先輩のお兄さん、お姉さんが親切に教えることで勉強に対する意欲が湧いているようである。実際に、当該プログラムは、中学卒業までとしていたのであるが、

松本市内の高校に進学することが決まった留学生もいるくらいである。いろいろな交流が、松本に根付くきっかけにもなるほど、人生に影響を及ぼしているというところであろうか。

更に勉強の合間の恋話や人生相談、進路相談などでも盛り上がっており、笑い声が外まで響くくらい充実した時間を、毎週、中学生と大学生は過ごしている。これは、子どもにとっては、親元を離れているさみしさを紛らすことになり、教員志望の学生にとっては、将来責任をもつ年代の子どもたちがどのような問題を抱えており、それをどのように解決する手助けができるかを学習するいい機会になっているわけである。

このように信州大学のお兄さんやお姉さんとコミュニケーションを取る機会が増えたことで、将来信州大学を目指す子どももいるのが現実のようである。

この連携が、どれほどの効果を双方で上げているのかを検証するのは、時期尚早といえようが、この学習支援のボランティアが信州大学と子どもたちとの架け橋となり、過酷な経験をしてきた子どもたちにとって、希望ある人生へのきっかけになることを、そして、教員志望の大学生にとっては内発的動機を高

め、将来教職に就く際に活かせる大きな経験になることを、大いに期待しているところである。

## 【注】

- 1) 信州大学全学教育機構准教授
- 2) 信州大学人文学部准教授
- 3) NPO法人まつもと子ども留学理事長
- 4) 信州大学人文科学研究科言語文化専攻修士1年
- 5) 本プロジェクトは、特定の中学と連携したわけではないので、厳密にいうと、中大連携とは言えないのかもしれない。しかしながら、中学生との連携ということで、ここでは、中大連携の一つの形として、取り上げることとする。

## 【参考文献】

花崎美紀、中村伸哉 (in press) 「大学生の英語科指導における内発的動機付けを高め、小学校の外国語活動の課題を克服するための試み：小大連携を通じた内発的動機付けと学習支援、および地域連携」『地域研究』

## 【参考資料】

文部科学省 2014年12月答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学びあい、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて(答申)」  
まつもと子ども留学ホームページ <http://www.kodomoryugaku-matsumoto.net/>

**【Abstract】**

Nowadays, regional collaboration between university and local institutions including local schools has become one of the major missions of universities, and with that trend, we, Faculty of Arts, Shinshu University has collaborated with nursery schools, and high schools. In 2015, we are advancing the collaborations into those with elementary school and middle school. This paper reports the details and the actual activities we are doing within the collaboration between Shinshu University and middle school students involved in Matsumoto Kodomo Ryugaku, Fukushima Children's Home Fund, a refugee program from Fukushima in Matsumoto city, the local city that Shinshu University is located at. The paper proposes and reports a collaboration that brings benefits to both university and middle school by overcoming the problems that both sides have.

**Key Words** Collaborations between university and middle school, intrinsic motivation, TESL, Fukushima Children's Home Fund, ICT Education